デカンショの町、丹波篠山にコリアンの足跡をたずねるフィールドワーク　飛田雄一

（むくげ通信 317 号、2023.3.26）

●

丹波篠山コリアンの足跡を訪ねるフィールドワークがあった。3月19日、主催は強制動員真相究明ネットワーク（共同代表・庵逧由香、飛田雄一)。好天に恵まれ、25 名が参加した。北海道・九州からソウルまで多彩な参加者だった。

『消えたヤマと在日コリアン』（岩波ブックレット）／『デカンショのまちのアリラン-篠山市&朝鮮半島交流史-』

この２冊の本が出版されている。『デカンショのまちのアリラン-篠山市&朝鮮半島交流史-』をむくげ通信２２１号（２００７年３月２５日）で小西和治さんが紹介している。また、『消えたヤマと在日コリアン』は川那辺康一さんが３１０号（２０２２年１月３０日）で紹介している。

●

強制動員真相究明ネットワークは、研究集会のときにはその地でフィールドワークも行っている。私もその記録をむくげ通信にたびたび書いている。研究集会と別にフィールドワークだけを開催したのは、今回が初めてでなないかと思う。

案内人は、「銘板設置の会（丹波篠山)」の細見和之さん、愛沢革さん、そして「兵庫朝鮮関係研究会」の徐根植さん。『消えたヤマ・・』を書いた銘板設置の会の松原薫さんと川西なを恵さんは都合がつかなかった。兵庫朝鮮関係研究会の徐根植さんは、1984 年に篠山で初めて篠山コリアンの調査を始めた人物でもある。

私は主催者の真相究明ネット側。フィールドワークは慣れているとはいえ、その規模観、バスの大きさなどはいつも悩まされる。バスは、28 人乗りでいいか、45 人乗りの必要があるかなどなど。今回は、えいやーと 28 人乗りにした。申し込みがオーバーしたら断る、それでも押しかけてくる人がいれば勝手に自分の車で追いかけてもらうことにした。幸い参加者は 25 名、補助席が 3 席あくだけのフィット感？だった。

●

午前 10 時に JR 篠山口駅に集合。出発は 10 時半となっている。みんな、それなりに緊張して時間通りに集まった。いつもの真相究明ネットの事務局的なメンバー以外にも初めて見るメンバーも半分近くいた。(「金太郎飴」的ではなかった。意味の分からない人はネットを・・。)

バスは、一路篠山城へ。篠山口には JR の駅があるが、篠山には駅がない。むかし、由緒ある篠山に鉄道なんかひけるかと殿様？が言ったため JR（省線）からはずれたと私は聞いている。ちなみに、篠山城内に、神戸大学農学部の前身となる兵庫農大があった。私は、1969 年入学の農学部４回生。上級生には六甲と篠山に通っていた人もいる。先輩から兵庫農大のこと、丹波篠山のことよく聞いた。「デカンショ節」は、デカルト、カント、ショーペンハウエルから来ていることも聞いた。この歌は農学部の宴会でも定番だった。踊りもついていたが忘れた。替え歌がどんどんでてきて、きりがなかった。「せんこせんこといばるなせんこ、せんこせいとのなれのはて」。これは、まだ上品な方だ。城内にあった兵庫農大の建物も今はきれいに撤去されている。

●

バスで約 20 分、篠山市街の篠山城駐車場についた。篠山城は、「1609 年（慶長 14 年)、徳川家康は、松平康重を常陸国笠間城から丹波国八上城に移し、さらに新城の築城を命じた。これは、山陰道の要衝である丹波篠山盆地に城を築くことによって、大坂の豊臣氏をはじめとする西国諸大名のおさえとするのが目的であったとされる。篠山盆地中心部の丘陵である笹山を築城地と定め、藤堂高虎が縄張を担当した。普請総奉行を池田輝政が務め、15 か国 20 の大名の助役による天下普請

により６か月で完成した。」

ウィキで調べたら 300 円を請求されたので支払った。なので？、引用させていただいた。

天守閣が当時からないのは、そのあたりの勢力図が関係しているとは、案内人愛沢さんのおはなし。私は、篠山城の石垣が特にすきだ。石の感じが登りたくなる形状なのだ。登ったことはない。

●

そこの駐車場にバスをおいて、フィールドワークがスタートした。

まず、本丸に登る。天守閣がないので、景色がいい。細見さんから、きょうのフィールドワークで回る場所の説明を聞く。すぐ下の民族学校跡、珪石鉱山跡、豊林寺の方向などなどだ。

私は、たびたび来ているので、それなりの土地勘がある。最近はサイクリングでもよくきている。もちろん、イノシシ（ぼたん鍋）のために来たこともある。

概略をつかんだところで、城の東すぐの篠山小学校に行く。細見さんは京都大学大学院教授で大阪文学学校の校長でもある。1962 年生まれの細見さんは、まさにその学校あたりで生まれ育ったとのこと。

篠山小学校の中に、銘板がある。

一九五〇年一二月から一九八一年三月まで、篠山の在日コリアンの生徒たちのための民族学級「篠山小学校特設学級」がここに設置されていました。

戦前・戦後の篠山では鉱山を中心に多くの朝鮮人が働いていました。なかには強制連行で連れて来られた人もいました。戦後、親たちが子どもたちのために国語（朝鮮語）講習所を市内に四ケ所つくり、それらが統合され「紀上朝連初等教育学院」が設置されました。設置場所は当初は上立町の集会所「孔雀会館」、その後は西新町の個人宅でした。旧文部省の閉鎖令により、一九五〇年三月に篠山の朝鮮人学校は閉鎖されますが、兵庫県は篠山小学校内に民族学級を設置し、民族講師一名を派遣して在日コリアンの生徒たちに母国の言葉や地理、歴史などを教えることとしました。篠山小学校内の民族学級は、二代の講師によって、三十年四ヶ月にわたって維持されました。これは兵庫県下で最長とされています。

二〇〇七年十月一日

篠山市人権・同和教育研究協議会

篠山市教育委員会

篠山小学校

２００７年にこの銘板が作られたことがすばらしい。銘板の会は、その後も歴史調査をすすめて、７カ所に銘板を設置している。今回のフィールドワークではそのうち５カ所を回ることができた。

左は当時／右： 篠山小学校銘板前での記念写真

この左の写真は、『デカンショのまちのアリラン』73 頁の写真。1948 年 3 月 27 日撮影の紀上朝鮮人連盟初等学校。私たちも、銘板の前で記念写真をとった。（こけてる人がいる）

篠山小学校は篠山城の東直下にある。城から篠山小学校をとった写真が左、右は同豊林寺方面をながめている。快晴だ

次に向かったのが孔雀会館。そんなに離れていない。ここにも銘板がある。

孔雀会館の沿革

昭和二（一九二七）年　町内各位の寄付と故団野源三郎氏の土地提供により、上立町の集会場として建築。資材を旧三田町（現三田市）の料亭より購入し、移築する。

昭和二十（一九四五）年十二月～昭和二十四（一九四九）年九月朝鮮人学校（紀上朝連初等教育学院）として使用される。

昭和二十四（一九二九）年十二月町内各位の寄付により、第一次改修・改装工事なる。名称を「孔雀会館」とする。

平成七（一九九五）年一月　阪神・淡路大震災に際して大屋根に被害。

平成十二（二〇〇〇）年三月　町内各位の寄付により、第二次改修・改装工事なる。

平成二十（二〇〇八）年一〇月一日

上立町自治会

●

午前のフィールドワークはここまで。昼食のために篠山城にもどる。ちょうど３月１９日は、「今よみがえる 110 年振りの鉾復活巡行！」のイベントの日。その鉾をみることができた。また各自おもいおもいの昼食ののち、「大正ロマン館」も散策した。有名な黒豆入りのクラフトビール？を買った人もいる。

鉾／大正ロマン館

午後、まずは、みさとの里へ。ここの銘板には、以下のように刻まれている。当時この奥に「畑鉱山事務所」があった。1984 年に初めて調査にきた徐根植さんの写真（右）には、事務所の看板が写されている。

篠山を支えた畑の珪石鉱山

篠山の珪石は最初に一九一三(大正二)年ごろ大芋地区で発見され、一九二〇(大正九)年には畑地区でも発見されました。篠山の珪石はとくに良質で、主として製鉄所の溶鉱炉の原料に用いられました。

一九二三(大正一二)年に八幡製鉄所(のちに日本製鉄に統合)が畑鉱床を買い取り、一九二六（大正一五）年には畑鉱山が開かれました。採掘が本格化すると、篠山を支える中心産業の一つとなりました。

奥畑・火打岩にある二つの赤い鉄橋は、木橋があたりまえの時代に、重い珪石をトロッコで運ぶために架けられたものです。

一九四一(昭和一六）年、アジア太平洋戦争の開始とともに、珪石の需要はいっそう高まり、多くの朝鮮人労働者も鉱山労働に従事することになりました。戦争末期には「徴用」という名目で強制的に連れてこられた八〇名の朝鮮人もその中に含まれていました。当時、瀬利の八百里にあった日鉄鉱業の宿舎から隊列を組んで鉱山に向かう朝鮮人の姿が、毎朝見られたといいます。

一方、地域の中では、「菅珪石運搬組合」を作るなどして、鉱山産業を支えました。

戦後も、日本人と朝鮮人が鉱山で一緒に働いていましたが、珪石需要の後退によって鉱山はつぎつぎと閉山され、一九七九（昭和五四）年の畑鉱山の閉山とともに篠山の珪石産業は実質的に終わりを迎えました。

二〇一二年二月一日

篠山市人権・同和教育研究協議会

篠山市教育委員会

みさとの里づくり協議会

●

旧事務所跡「みさとの里」から更に北にバスで 15 分ほどのところに「畑鉱山」があった。バス

を降り、話を聞くがそこには物的な痕跡がない。話を聞きながら、このあたりまで鉱石が運ばれてきたこと、このあたりで「選鉱」されたこと、トロッコで積まれて福住まで運ばれたことを想像する。

バスをおりて旧選鉱場あたりを回る

そして、フィールドワークのおおづめ、豊林寺（ぶりんじ）に向かう。篠山市街から北東にバスを20分ほど走らせる。そこには、3名の名が刻まれた鳥山鉱山殉職者の慰霊碑がある。

この慰霊碑がもつ「歴史」そのものにたいへん興味をもった。銘板の会の松原薫さんが、調査の過程で「発見」したもの。この豊林寺の山にも小さな珪石鉱山があったが、鳥山鉱山は別のものだという。付近の山道に多くの古い墓石などがおかれていて、住職がそれを境内に集めた。松原さんがそのなかに慰霊碑があることを見つけた。

石碑左面に、「殉教者名　金本容鎬　上野三郎　武田三童」とある。そして松原さんは、事故の新聞記事もみつけている。1948年3月5日付けの篠山新聞だ。そこには金本容鎬（25）、姜俊伊（22）、竹田三童（43）の名前がある。さらに 1946 年の強制動員についての「厚生省名簿」のなかに「裵参童」の名前があることもつきとめて、それが竹田三童ではないかと推測している。

豊林寺の慰霊碑／正面（左）と右面（3名の名前）

『消えたヤマと在日コリアン』では、他の事故についても、詳細に当時の新聞記事を拾いだしている。豊林寺の銘板は以下のとおり。

豊林寺の珪石鉱山と殉職者慰霊碑

ここ玄渓山豊林寺(丹波篠山市福井)の周辺で、一九三四(昭和九)年に珪石が発見され、以来、一九六〇年代まで、篠山在住の鉱山事業者に受け継がれながら、珪石の採掘が続けられました。

篠山の珪石鉱山では多くの朝鮮人が働いていましたが、この豊林寺鉱山では、朝鮮人の親方のもと、とくに農閑期には、近隣の農家の人々も珪石採掘の仕事に携わっていました。

また、豊林寺で、鉱夫三人の名前を刻んだ慰霊碑が発見されました。その碑の向かつて左側面には「為鳥山鉱山殉職者之霊菩提」、正面には「南無観世音大菩提」、右側面には「殉職者名金本容鎬　上野三郎　武田三童」と刻まれています。

一九四八年(昭和二三)三月五日付の『篠山新聞』は、同年三月三日に起きた「村雲村鳥山鉱山」での事故による三人の鉱夫の死を伝えています。その記事と合わせて考えると、慰霊碑の三人の姓はいずれも日本風の名前ですが、三人とも朝鮮人であったことが分かります。

誰が建立したものか不明ですが、このような朝鮮人殉職者の慰霊碑が保存され、檀家の人々によって弔われているのは、全国的にも珍しく、貴重な記念碑となっています。

二〇二〇年三月三日
高野山真言宗総本山金剛峯寺
玄渓山豊林寺
丹波篠山市福井自治会・中自治会
丹波篠山市人権同和教育研究協議会
丹波篠山市教育委員会

●

最後の訪問先は、村雲駅モニュメント。私はサイクリングで何度もきたところだ。篠山口から福住まで珪石運搬のために作られた篠山線の駅のひとつだ。終点の福住駅からひとつ西の駅だ。駅の看板は、モニュメント移転後に新しくつくられたものだ。

私は、神戸電鉄沿線サイクリングのとき、自転車師匠の林榮太郎さんからこんな話を聞いた。むかし三田・有馬間に鉄道があった。アジア・太平洋戦争時に廃止となってその線路は、篠山線に利用された。有馬温泉遊びより軍需用珪石の方が重要だったのだろう。

三田有馬線の廃線跡はほんの少ししか残っていないが、篠山線跡は結構残っている。サイクリングコースとしてとてもいいのである。

村雲駅の銘板には次のように書かれている。

ここは篠山線の村雲駅がありました。かつては、客車とともに、鉱石を運ぶための貨物列車が行きかっていました。村雲駅では村雲・大芋地区から産出された珪石が溢れんばかりに積み込まれました。

篠山線の敷設工事は戦時下の一九四二（昭和一七）年十月二十二日に始められ、一九四四（昭和一九）年三月二十一日に篠山口―福住間が開通しました。戦争遂行のためマンガン鉱石や珪石の運搬を主な目的としていました。敷設には多くの朝鮮人が従事したと伝えられています。

翌年戦争が終わり、一転、篠山線は戦後復興という大切な目的を担って、地域住民の交通手段として親しまれるようになりました。しかし、鉱山の廃鉱にともない、次第に貨物輸送も乗客も減少し、住民の強い存続運動にもかかわらず、一九七二（昭和四十七）年三月一日、ついに廃線に追い込まれました。

村雲駅では駅名標が記念として残されました。この一帯には、当時の人々の思いとともにたくさんの珪石が埋められています。

この記念碑は、篠山線敷設のために土地を提供した向井地区の老人クラブ楽生会の尽力により建立されました。

二〇〇八年一月一日
篠山市人権・同和教育研究協議会
篠山市教育委員会
篠山市向井老人クラブ楽生会

村雲駅跡／細見さんの説明を聞く

●

銘板の会は、７つの銘板をつくっている。地道な調査の積み重ねによる成果である。その銘板は地域の団体とともにつくられているのも大切なところだ。今回、５つの銘板を訪ねることができた。銘板設置までの苦労もうかがった。銘板の会に敬意を表すために銘文を紹介した。それぞれの歴史については冒頭で紹介した２冊の本をぜひごらんいただきたい。

このようなフィールドワークができたことに 3 名の案内人に改めて感謝したい。

4 時半ごろには解散地点の篠山口駅に到着した。駅前の居酒屋での懇親会を事前に準備した。15 名。懇親会を主催するのも主催者の重要な役割だ。適宜席替えをしながら、話ははずんだ。家が遠いからと早々に退席する人、篠山のホテルをとったので何時まででもＯＫだという人、地元なので大丈夫だという人などなど。遅くまで懇親会が続いた。が、私はその最後は知らない。